

スタンフォード大学古典学科における大学院教育

ジョセフ・マニング *Joseph G. Manning*

スタンフォード大学

このたびは、日本の第一線で活躍する西洋古代史研究者であり、世界でも数少ないヘレニズム時代エジプトの考古学者でもある周藤教授とご一緒でき、まことに光栄に存じます。皆さんも同じように感じていらっしゃると思いますが、周藤教授は実に貴重な人材です。今回は、私にとって3度目の名古屋訪問にあたりますが、これを機に、今後さらに頻繁にこの地を訪れることができればと願っています。

スタンフォード大学と名古屋大学、とりわけ古典学科とここ文学研究科との間で、今後活発な意見交換がなされることを望んでいます。周藤教授は(2006年)10月初旬に、10日程スタンフォードに滞在し、私の所属する古典学科と考古学科で講演をする予定になっています。今後、両校の教員だけでなく、大学院生の交流も行なえるようになることを期待しています。このことに関しては、天野教授とも何度か意見を交わしています。

今回こうして名古屋大学に再び戻ってこれてきて大変うれしいですし、今日のように少人数で話した方が、形式的にならなくていいと思います。私自身、今日は友人としゃべるような気持ちでのぞんでいますので、もし私の話す英語が早すぎるようでしたら教えてください。私も日本語を勉強中ですが、ゆっくりしか話せませんので、今回はわかりやすい英語で話します。みなさんの理解に十分な速さで話せるのですが。

今回は、スタンフォード大学の大学院教育の構造について、私の所属する古典学科の視点からお話ししようと思います。質問や意見がありましたら、話の途中でして下さってかまいません。

ご存知のように、合衆国の教育というのでしょうか、アメリカの教育文化というものは、まさにこの国のようにとても多様であり、なかでもスタンフォード大学のそれはかなりユニークなものになっています。学部教育と大学院教育に関して、ここ10年で大幅な改革を行ってきました。ですから、スタンフォード大学と、ハーバード大学やプリンストン大学といった

大学とを比較して述べることは、かなり見当違いなものになってしまいます。これらの大学は完全に別のものであり、文化に関しても教育システムの構造に関しても、まったく異なっているのです。そのため、今回の話も、あくまでスタンフォード大学にあてはまる話であって、大学院教育の適切なモデルは他にもたくさんあると思います。

実際アメリカには、短い年数で修了できるものと、何年もかけて修了するものとの、2種類のPhDプログラムがあります。スタンフォード大学のPhDプログラムは、前者の、短期で修了できる5年プログラムを採用しています。とはいえ、大半の学生は修了に6年かかってしまうため、時には学生に発破をかけることもあります。一方、シカゴ大学、カリフォルニア大学バークレー校、ミシガン大学、ハーバード大学などは、8年、9年、10年という長い年数を必要とする厳しいPhDプログラムを採用している大学といえます。時には、PhDのプログラムとしては期間の長すぎるものもありますが、要するに、これらの大学では修了期限が決められていないのです。学生は入学し修了する。修了年数は、事実上、学生によりけりなのです。

スタンフォード大学やプリンストン大学では、財政支援の面で年数に限度があります。スタンフォード大学は修士課程の学生を多くとらないので、ここで大学院生というのはPhDの学生を指しているのですが、



彼らに対する支援は5年が保証期間となっています。ですからすべての学生は同じレベルの資金援助を受け、それ以外はなにもありません。そうすると、学生は期間内に課程を修了しなくてはならないのです。資金が底をつくことが、修了を促す誘引となることもあるでしょう。

アメリカにおけるこの2種類のプログラムの違いは、教育に対する理念の違いともいえます。私の母校であるシカゴ大学では、PhDを取得するということは、その学生が修了した分野において一人前の専門家であるということを意味しています。しかしスタンフォード大学の場合、PhDとは学生が取り組んでいる分野での、単なる初めての研究であるに過ぎず、一流の研究というわけではありません。そのため、シカゴ大学のような伝統的なPhDプログラムよりも短いプログラムとなるのです。PhDに対する理念は様々ですので、名古屋大学がどのような理念をお持ちなのか、私としては興味がありますね。

短期間で修了できるプログラムは私も好きなのですが、しかし、こういったコースにも問題点はあります。それは技術的な問題です。私の担当はエジプト学ですが、この学問は多くの語学トレーニングを必要とします。そうすると5年間というのは非常に短い。時間がそれほど問題にならない数学のような学問とは異なり、エジプト学は、語学、古文書学、考古学での指導を技術面で必要とします。

この教育システムは、完璧に学生を指導することを目的とした場合では問題となります。ですから、短期間で学位を取得するという問題について我々も今検討しているところです。新しい分野に関していえば、スタンフォード大学のような短期間のPhDプログラムの中に新たな分野を導入すること、例えば、スタンフォード大学のエジプト学に別のプログラムを導入することは非常に難しいことになると思います。短期間のPhDプログラムには構造的な限界があると私は思います。

スタンフォード大学の古典学の5年プログラムの場合、多くの学生が修了に6年を要することから、もう1年分の資金調達が必要となります。通常は教員も手助けをするのですが、最終的にどうするかは学生たちにかかっています。

スタンフォード大学の構造についてご存知でなければ、後ほどそのことについて少しお話しますが、基本的には大学があって、その下に学部があります。最も規模の大きな学部は人文学部と理学部です。工学部、

経営学部、法学部、教育学部もありますが、スタンフォード大学では人文学部と理学部が圧倒的に大きな学部となっていて、教員の約80%、学生の大半がこのどちらかに属しています。学部の下には学科があり、古典学科、歴史学科などがあります。そして各学科は会計、管理の面では比較的独立しています。ですから、大学院生を受け入れる場合、すべての手続きは学科内で処理されます。大学側は書類関係以外このプロセスに関与しません。大学が申請書類を管理し、我々はその書類を受け取って入学許可の決定を下すのです。学生に対する財政支援は学部が行ないます。毎年何名の学生を全額援助のPhDとして許可するかを検討するのですが、平均すると年に各学科で5名のPhDが援助を受けています。

スタンフォード大学は小さな大学だということはご存知でしょうか。学生数は約10,000人、教員数は約1,000人です。これは、カリフォルニアのライバル校であるパークレーのおよそ3分の1の規模です。ですから、学科はもっと規模が小さく、大学院の学生数はさらに少ないといえます。意外かもしれませんが、スタンフォード大学の古典学は実は始まったばかりなのです。私も赴任したばかりのときは、PhDの指導が1950年代から始まったことを知り驚いたものです。たかだか50年間という短い歴史しかないのですから、スタンフォード大学はアメリカの大学の水準で言えば、まだまだ若い大学なのです。

それでは、次にプログラムに関して、どのように学生を指導しているかについてお話ししましょう。

スタンフォード大学では、どの学部のPhDプログラムもほぼ同じ構造となっています。ただ唯一異なる点は各学科で要求されること、つまり、どのように学生を指導するかという点です。多くの大学院生は135単位(通常のコースは5単位ごと)が必要単位で、本校は3学期制なので各学期に大体3コースずつ、1年で平均9コースを履修するようになっています。

もう1つ別にスタンフォード大学で大学院生に行なわせていることは、下級生に対する指導です。本校の形式が典型的なものかはわかりませんが、アメリカの大学院教育のなかではかなり一般的なものだと思います。大学院生は年に平均9コースを3学期の間に履修し、2~3年目に学生指導のコースを取得することが望まれます。彼らはそれぞれ最低4コースを教えるか、大教室での講義でTAとして働き、課題の採点や、学部生とのディスカッションを行なう場を設けたりすることになります。自分たちの課題をこなすだけでな

く学部生に教えるわけですから、かなりの負担になっていると思います。

古典学科には4つのPhDコースがあります。すなわち、ギリシアやローマの古典文学コース、哲学コース、古典考古学コース、古代史コースです。これらのコースは学科内で4つのプログラムに分かれており、必要とされることもそれぞれ若干異なっています。しかし、すべての学生は専門が何であれ1～2年目に同じコースを履修しなくてはなりません。これは、ギリシア・ローマの古典文献学を中心とした古典学科における伝統的なアプローチといえるのですが、そこでは、考古学や古代史専攻の学生であってもギリシア語、ラテン語を修得しなくてはなりません。この方針を変えないのは、これらの教科こそ古典学教育の核であり、就職の際に役に立つと考えるからです。我々は、自分たちの学生が職を得て、スタンフォード大学の名誉を担うことを望んでいます。自分たちの学生がどのような業種についたかによって、次の世代、次の大学院生の新しい波を呼び寄せることができるのです。

このような指導コースは伝統的なものですが、古代史専攻や考古学専攻の学生であっても将来古典学科で職を得ることができるようなサポートになっていると思います。彼らが小さな大学で職を得た場合、スタンフォード大学でも実際にそうなのですが、様々な教科を教えなくてはならないでしょう。そのような大学ではこのコースはそれほど旧態依然としたものではないのです。確かに本校の指導は時代遅れなものかもしれませんが、これはよい形態だと思っています。しかし、学生は必ずしもそうは思っていないでしょう。1年目にギリシア語・ラテン語構文、ギリシア語・ラテン語文学概論、意味文法を履修するなど、確かにスタンフォード大学の人文系学部でも最もきついコースであることは間違いありません。それでもこのような訓練は就職市場ではきつと役に立つと思います。

これに加え、学生は3年目以降に、専門科目で最低10回の大学院セミナーをとることになります。レベルは様々ですが、ギリシア語・ラテン語構文、文学概論、そして3年目以降の専門科目のセミナーが用意されています。

1年目が終わると、学生は長文のギリシア語からラテン語のテキストを与えられ、その箇所を翻訳試験を受けなくてはなりません。2年目には1年目とは別の言語で同じような翻訳試験があります。2年目、3年目の学生はこのほかに、フランス語、ドイツ語、イタリ



ア語のうち最低2ヶ国語の翻訳試験を受けなくてはなりません。

そしてすべての学生はPhD試験のために、5本のセミナー論文を提出することになっています。もちろんすべてのセミナーで論文提出が求められていますので、学生は3年で少なくとも10本の論文を書くわけです。論文は通常30ページ程度の長さで、参考文献がきちんと挙げられていることが要求されます。これも、彼らが博士論文を書く時に役立つことでしょう。

3年目の頭には、恐ろしい試験週間が学生を待ち受けています。この期間に、ギリシア語、ラテン語、古代史、哲学に加え各自の専門科目の試験を行ないます。

3年目でもそのまま学生たちは学部生の指導や、教授の講義のTAに就くことになっています。学生の予定があればセミナーの数は増えます。4年目の秋学期が終わる頃までには、学生は論文計画書を提出し、論文委員会の前で審査を受けなくてはなりません。委員会は3名編成で、うち2名がスタンフォード大学の教授で、他の委員は大学外部の人間になることもできます。

我々も多くの分野に取り組んでいますが、スタンフォード大学の古典学科には18名の教員しかいません。この数字から我々の学科が中規模のものといえるのですが、それでもすべての分野を網羅することはできないため、大学外部の教授に審査される学生も多いのです。こうして学生は4年目のはじめか、遅くとも5年目の秋までには論文計画書を提出し審査を受けることになります。

論文計画書がどのようなものであるかはウェブサイトや大学院ハンドブックに掲載されています。大体50ページくらいのもので、研究トピックに関連する参考文献や議論に重点をおいたものになっています。学生にとってこれは1年がかりの作業でしょう。3年

目在学中か、4年目にはいる前の夏休みに、学生はこの論文計画書の作成に一番時間を割きます。この作業は研究を始める前の十分な準備作業であるため、我々もこの論文計画書を大変重要視します。こうしてできあがった文書はのちに博士論文の第1章になることもよくあります。

4年目になると、学生は本来、学部生の指導は行ないません。というのも4年次生はスタンフォードでTGR (Terminal Graduate Residence 大学院の最高学年) と呼ばれる期間に入り、この期間中は他の雑務からは解放され、学内外で研究に100%集中することができるようになるのです。もちろん、4、5年次の学生は学外にでることも望まれます。例えば、考古学専攻の学生でしたら、研究テーマにそって海外の調査に参加し、欧州の研究機関で研究をすることになります。我々も、学生が夏の間海外にいけるよう、研究科から独自に資金援助をしています。我々はこの点に特に力を入れており、ほとんどの学生が最低でも1年は、海外の研究機関で様々な専門家とともに研究に従事できるようにしています。

私のもとでも、現在2名のPhDの学生がおりますが、1人は1年の大半をドイツの研究機関で、もう1人は夏と秋学期をベルギーの研究機関で過ごしています。このように学生はスタンフォードから外に出ることで、より多くの研究者とやりとりができるようになります。5年次生はさらに論文執筆を進め、5年目の春に論文提出と審査を通過するのが理想ですが、さらに1年かかる学生が多いのが現実です。実際の論文審査とは別に、教授陣と学生の前で30分程度の研究報告もあります。その後、論文審査委員会との質疑応答があり、学生は事務所に提出できるよう最終指導を受けます。提出時期は通常スタンフォードでは5月の半ばで、6月に修了することができます。

以上が、古典学科という狭い枠の中でのPhD教育の構造ですが、スタンフォード大学全体でも、概ね似たような内容になっており、物理学であれ古典学であれ、すべての学科でPhDは5年制になっています。PhDに必要な単位数も共通して135単位です。唯一異なるのは、我々が学科内において求めるものです。ここでは、いくつかの構造上の問題について、我々がそれにどのように対応しているか紹介します。

何度もお話ししたように、本学科の教育計画はとても融通の利かないものになっています。2年間をギリシア語やラテン語の勉強に費やすような従来どおりのプログラムではなく、古典学に関連する他の専門分野

の学生を考慮したプログラムへの再編が必要だと思えます。実際、考古学を志して入学した学生は、より専門的な考古学者を目指しているのであって、必修のギリシア語・ラテン語文学を必要としてはいないのです。

そのため、我々は必修科目について検討する必要があります。しかし当面はすべての人にこのプログラムそのものを認めてもらわなくてはいけません。申請人数に関して、名古屋大学はどのように承認しているのでしょうか？ 入学手続きに関してもどうでしょう。現在我々のところには、年に60名ほどの申請があり、7～8名を合格させ、うち5名が入学するのが普通です。おおよそのパーセンテージを提示しましたが、教授間で入学許可をめぐって激論になるので、誰を合格させるかを決める教授会はいつも興味深いものになります。

先ほども述べましたように、大学院生は研究目的での渡航が奨励されており、我々は彼らに対し資金援助を行なっています。すべての大学院生は年に少なくとも1回は学会に参加できるように援助を受けており、彼らが4、5年次に修了した際に就職面接のあるAPA (American Philological Association) の国際会議に参加できることを我々は期待しています。

学生は海外に行き、学会に参加し、4、5年で修了することが望ましいのですが、すべてをこなすことはできません。しかし我々はそれでも彼らを強気にサポートしています。大学院生には常に模擬面接を行ない、就職面接がどのようなものなのかを教えています。学生も面接がとても厳しいものであることは分かっています。ですから面接を控えた学生には、何が質問されるのかを予想させています。このようなやり取りは1月中はとくに頻繁に行なわれ、学生への就職活動の助言もよくしています。

ウェブサイトや大学院ハンドブックで他に扱っていることは、文献リストの公開です。これは、セミナーや講義ではすべて扱うことのできないテスト範囲の内容をおさえたものです。アメリカでは極めて一般的なのですが、すべての学生が知っているべき古典作品などのリストを実際に公表し、それをベースにテストを作成します。ですから学生は、自分で多くの課題をこなすことはもちろんですが、教授から指導されたものを読むか、夏の間独自に3年次テストに備えていなければなりません。

このように、スタンフォードでのPhDコースの最初の2年は実に多くの課題が集中しています。学部生

指導や、さまざまなレベルでのコースワークに加え、多くの学生にとって語学の勉強を行なうこともかなり厳しいことでしょう。さらに各自で文献を読み進めなくてはなりません。5年制のプログラムに6年を要する理由の1つはここに 있습니다。また、特別研究員として大学の人文学センターで1年を過ごす学生も多くいますが、結局のところ6年目の学費を払っている学生も中にはいるのです。このように、本研究科の5年制プログラムは、事実上6年制であるといえるでしょう。詳しい内容はウェブ上の大学院生ハンドブックに掲載されています。

以上、古典学科における大学院教育の構造についてお話ししました。みなさんからコメントやご質問がいただけたら幸いです。

Q: お尋ねしたいことはたくさんあるのですが、(教育の) 質については十分存じております。ですが、一体どのようにそれを実現されているのですか? どうしてそんなに(大学院生全員に払えるような) たくさん資金があるのでしょうか?

A: それは、本学には学部学生がたくさんいるからです。先ほど大学院生の入学について触れましたが、年に平均5名の大学院生を受け入れています。この数字は、工学部や法学部、経営学部といった大きな学部を除けば、スタンフォードの学部では典型的な数字です。奨学金の数は学部生の在籍数で決まります。大学が教員に対し学部生指導に熱心に働きかける理由はここに 있습니다。しかし、我々の多くは、大学院生の指導や自分の仕事に集中したいと思っています。

大学院生の入学者数は、我々が教える学部生の在籍数にかかっています。ですから、講義をもつということは我々にとって非常に重要な意味をもちます。大学での講義はマーケット主導型なのです。教員は自分たちの講義に学生を惹き付けなくてはなりません。スタンフォード大学は、みなさんもお存知のように、マサチューセッツ工科大やカリフォルニア工科大のようにかなり理系色の強い大学で、自然科学、工学に力を入れています。中には古代史研究者のように魅力的な人たちもいます。それでも、大学に対し、人文学がどれほど重要であるかということを示さなくてはなりません。というのも、アメリカの大学ではありがちなのですが、大学は人文学について実際これといって理解してはいないのです。おそらく世界中でもそうなのではないでしょうか。

今回は1つのチャンスだと思います。スタンフォードは新しい大学ですから、プリンストン大学のように古典学を理解していません。プリンストン大学の古典学科は350年の歴史がありますし、当初から古典学は重要な位置にあります。しかしスタンフォードは違います。理系大学であるため、人文学や古典学が重要であることを学生にわかってもらわなくてはなりません。そのためにも、これは異議を申し立てるいいチャンスだと思うのです。

実際、本学の研究科は世界でもトップレベルにあります。どの学科も学生がたくさんいます。これも我々の努力の結果といえるでしょう。工学部の学部生を我々の一般教養の履修科目に呼び寄せるよう尽力しました。すべての学部生は、たとえ工学部の学生であっても人文学などの別の講義をとらなくてはなりません。しかし、どれを選択するかは彼らに 있습니다。ですから、教員の人間性や、講義をおもしろくし、なおかつ知的な内容にすることも重要となるのです。

その点、名古屋大学の文学研究科には学生がたくさんいますし、古典学の場合、全体の在籍者数は非の打ちどころがないわけです。学部長は1学部あたりの在籍人数を算出するための公式をもっています。ですから、学生の数によって、何名の大学院生が奨学金を得ることができるのか決まってきます。もし、学部生を1人も教えていないと、その研究室では大学院生を1人も受け入れることはできません。すなわち、学部生と大学院生の数は結びついていくわけですから、自分たちの講義に何名の学部生がいるかは、非常に重要なことになるのです。

これとは別に、スタンフォードが経済的に恵まれているのは、シリコン・バレーに立地していることにも起因しています。これによって、数多くの関連企業との間に同窓生を通じた強力な繋がりを得ることになるのです。この点に関しては、おそらく全米一でしょう。ハーバードはとてその長い歴史で有名ですが、スタンフォードでも、同窓会のおかげで、学部生はとりわけスポーツ活動や施設の整った学生生活を通して大学に愛着を抱くようになります。

ご存知のように、大学周辺の環境もとても魅力的です。ただ、これについては心配な点でもあって、学部生の経験とは教育に関するものだけでなく、大学外での経験も意味しています。ですから、学生数を維持するためには、簡単なことではないですが基

準を設けることはとても重要となります。もし講義を難しくしてしまうと、学生はその講義をとらなくなってしまう。適切なバランスを見つけることはとても難しいのです。

Q：多くの学部生を教えるから、大学院生は奨学金を得られるのですね。

A：ええ、そうです。スタンフォードの大学院生は1ペニー、1円も授業料を払いません。5年間完全に無料なのです。この点は、シカゴ大学とはまったく異なります。シカゴ大学にはこのようなプログラムはありません。学生の中には奨学金を得ている者もありますが、お金のない者もいます。中には一部だけ支援を受けている者もいますが、シカゴの学生は毎年経済援助を受けられるよう互いに競い合わなくてはなりません。これにより、大学院生たちは仕事を一生懸命やるようになるので非常にいいのですが、かなり競争の激しい社会であるともいえます。スタンフォードの場合は、もっと社会主義的で、幾分興味深いものになっています。つまり、すべての学生が5年間同じように資金援助を受けているという状況なのです。しかもかなりの額を。彼らは授業料や家賃だけでなく、毎月の固定給も手にしています。年間で約50,000ドルです。

大学院生1人が入学するということは、つまり、約250,000ドルが動くことを意味しています。学生1人に対しては、とても大きな額です。ですから、これは時々起こることなのですが、1年間在籍した学生が翌年に退学してしまうと、私たちは非常に腹を立てるのです。つまり、我々にとって4年間分の資金を失うことと同じなのですから。これらの資金は非常に大きな額ですが、基本的には学部生の授業料と我々が大学から得る予算によってまかなわれています。この点に関しては、本学は非常に恵まれています。

パークレーやミシガンといった、大きな公立大学は少し異なった状況にあると思います。恐らくそれほどお金がかからないのでしょう。PhDが時間的により長くなっている原因の一部はこの点にあるといえます。しかしそこでは資金の保証はありません。

Q：大学院生に、どのような手続きで学生指導をさせているのですか？

A：これは入学契約の一部なのです。学生に入学許可を出す際、学生に長い規定書を渡します。そこで彼らは少なくとも4コースを教えるか、またはTAとして4コース受け持つかを要求されるのです。

彼らの手にするお金の一部は、こういった彼らによる指導に対して大学が支払う給料といえます。ですから、我々は契約の一部として学生に指導を受け持たせるのです。

A：学生指導としての単位を与えるのですか？

Q：いいえ、お金を支払うだけです。履修単位というわけではないのですが、学生は必ず指導をしなくてははいけません。むしろ4コース以上を受け持つ学生のほうが非常に多いです。奨学金が底をついた学生や博士論文にまだ取り掛かっているような学生はお金に困っていますので、多くの授業を担当することはよくあります。彼らへの指導料は、他の教授が研究調査やサバティカルなどで大学を離れた場合に、そこから捻出することが出来ます。

Q：TAによって学生の指導力は高まると思いますか？

A：ええ。この点に関しては、スタンフォードの学生は恵まれています。彼らにはとても多くの指導経験が身についています。多くは自分の専門コースでギリシア語やラテン語を教えています。TAとしてではなく、専門コースでの初級ギリシア語、ラテン語を教えているのです。通常、これらを教えるのは教員なのですが、初級のギリシア語とラテン語はもっぱら大学院生が担当します。もちろんこれには良し悪しがあるのですが、大学院生にとっては、指導経験があることで立派な履歴書を書くことができる、非常によいシステムなのです。また、指導経験履歴には学部生の評価も含まれています。これはすべてのコースで、学部生が教授や教員に関する評価を行なうものですから、よい指導評価を得た院生は、就職戦線で優位に立つことができると思います。

Q：あなたの学生は、大学での教員職を得ていますか？

A：ええ。ほとんどの学生は職を得ています。ここ5～6年で大学のプログラムがより強化され、古代史や考古学のコースで、従来のギリシア語、ラテン語のプログラムに、新たなプログラムも導入しました。現在、こうした新たな分野での求人市場にも乗り出しているところです。ここ2年の間で、学生は皆就職しています。

現在、修了生のほとんどが大学で教えていますが、自分の研究ができるような大学ではありません。それは、次のステップになります。彼らが1つの大学で研究者レベルの職につけることは非常に重

要なことです。ただ4年制の大学で教鞭をとることより大切なことです。アメリカには、PhDを育てる大学院中心の研究大学に対して、学部生だけを指導する大学もあります。これまで自分たちが行ってきた職の多くは、このような学部生を相手にする4年制大学でしたが、学生たちには研究活動のできる大学への就職を強く望んでいます。できれば、大学の評判と語学科目での指導経験が役に立てばよいのですが。とにかく、大学院生にとってこの5年間は徹底的に取り組みなくてはいけない時期であるといえます。

Q：お話を伺うと、スタンフォードのプログラムは容易ではないように思えるのですが。

A：いえ、そんなことはありません。短期間の易しいプログラムです。

Q：学生たちはどのように感じているのでしょうか？

A：考古学や古代史の学生たちのほとんどは、語学の履修を好んではいませんね。というのも、一方は非常に歴史的だからです。スタンフォードの古典学科はとても伝統的なもので、ギリシア語とラテン語を必須としています。ここ10年で、学科の規模は2倍になり、常勤スタッフの数も7～8人から18人に増えました。ですから、学部も多くの新たな分野が増えたことで2倍の規模になってきています。それでも、プログラムを変更してはいません。

古典学科のプログラムは依然としてギリシア語とラテン語、古典文学を必須とする古いプログラムなので、グレコ・ローマン時代のエジプトについて取り組んでいる古代史の学生は、ラテン語構文に関しては気に掛けていません。しかし、職を探す段階になると、このプログラムはとてもよいものだとわかります。ですから、学生がこのプログラムを気に入ってなくても、結果としては就職に役に立っているのです。

Q：そちらの学科には毎年50名ほどの入学志願者がいるとのことですが。

A：ええ。昨年は約50～60名の志願がありました。ここ数年で増加しています。もちろん浮き沈みはあります。全国的に当てはまることですが、景気が悪いとPhDの志願者は増加しますし、逆だと減ります。

Q：スタンフォードの古典学科はとても人気があると思いますが、その理由は何だとお考えですか？就職や資金によるものでしょうか。

A：大学院生にとっては、教授陣の研究業績が一番の理由だと思います。他にもいろいろな理由があると思いますが、教員スタッフの講義や研究などが中心でしょう。学科の受ける評価とは教授陣の研究なのです。それに教員は学生に対し非常にオープンに接していますし、学生の指導もきちんと行なっています。我々は電話で、求職先や面接の時期などを確認し、学生たちを送り出したりすることで、十分学生をサポートしています。他にも豊かな資金を得られる点や、大学周辺の環境も人気の一因だと思います。

スタンフォード周辺は天候も穏やかですから、それが決め手で本校を選ぶ学生もたくさんいるのです。しかし、逆に学生たちがスタンフォードを離れたがらない、という問題もあります。ですから、我々は学生が学外に出るよう後押しし、就職活動をするように調整もするのです。それでも彼らはもう1年サンフランシスコに留まりたがるのです。環境に関しては長所であり短所ですね。それでも、我々の学科が人気である最大の理由は、教授陣の出版物や研究活動、それに大学のもつあらゆるパブリックイメージにあると思います。

Q：まだ時間に余裕があります。他にご質問は？

A：コメントをいただければ幸いです。名古屋大学がどのように大学院改革に取り組んでいるのか、大学院改革がどのようなものなのか、名古屋大学にとってのゴールは一体何でしょうか。

名古屋だけに限らず、世界的に大学は変化のときにあると思います。オーストラリアでは教育システムの大々的な改革案が通過しようとしています。アメリカの学校も10～15年前に改革がなされました。ですから、これは世界各地で起こっているグローバル化への対応であり、すべてが変わろうとしている



のです。

Q：実際、名古屋でもあらゆる点で進展はしているのですが、志願者数は減ってきています。今回、マニング先生をお呼びしたのもそういう事情があったからなのです。

A：減少しているのは学部学生ですか、それとも大学院生ですか？

Q：大学院生です。

A：なるほど。それは、PhD に対する日本的な現象なのでしょうか、それとも大学のもつ就職市場での役割によるものなのでしょうか。アメリカでは PhD は主にキャリアのためです。大学院に進む人たちは、自分が仕事を得られると思っているから進学するのです。日本でその状況がわからないのですが、かつてのアメリカでは、勉強する時間がもっとありましたから、みな大学院に続けて進学していました。それでも当時は就職とは縁がありませんでした。私自身は勉強をしたくて大学院に進んだので、ある意味愚かだったな、と思うのですが。それくらい仕事に関してはそれほど考えてはいなかったのです。しかし、今のアメリカの学生は、いい仕事に就けるのか、これだけ投資をして最終的に安定した職に就けるのかを非常に気にします。そこが大きな違いなのでしょう。

景気の変動が、入学志願者数の増減に関係するのもここに理由があるからです。もし景気がものすごくよければ、ビジネススクールで MBA を取得し、経営センスを磨き、企業で働いた方が断然よいわけです。どうしてわざわざ5年も10年もシカゴで過ごしたり、ただでさえ不安定な就職市場で研究活動をしたりしようとするのでしょうか。

アメリカでも優秀な大学院生を獲得しようというのは大きな課題となっています。

スタンフォードは、競合校であるバークレーとの間で古代史や考古学の学生を奪いあっています。しかし毎年全国的に見ても、本当に優れた学生というのは一握りです。ですから、たくさんのプログラムを用意するのです。

質の高い学生を獲得することに関しては、我々にとって今後の課題であり、これまで以上に力を入れて検討しなくてはならない案件です。優れた学部生の獲得も同じです。本校の古典学科に関しては今年から、高校生を対象にスタンフォードで古代史や古典学の勉強をすることについて考えてもらおうと話をする機会を設けました。今後大学が生き残る

ためには、高校生の段階から積極的にアピールしていく必要があります。

Q：名古屋大学も新たに始めたばかりですね。

A：スタンフォードでは、入学者募集や、古典学科にはまだ十分ではないのですが、見栄えのするウェブサイトの作成にとっても力を入れています。大学をどのように売り込むか、という点でイメージというのはとても重要です。このような表現は好きではないのですが、まさにビジネスなのです。それでも、スタンフォードは法人としては最先端にある大学といえます。本校はかなり法人的な要素を持っていますし、これは他のアメリカの大学でも今後増えていく傾向だと思います。

Q：日本でも同じような状況ですね。ところで、スタンフォードの学生、大学院生や PhD の学生は、一般企業への就職を希望していますか？

A：いいえ、みな教員となることを望んでいますし、ほとんどが4年制大学や、高校でギリシア語やラテン語を教えることを希望しています。そのような学生はたくさんいます

古典学に魅せられていますからね。

Q：スタンフォードの古典学科はとてもうまくできていることはよくわかりました。他の学科でも学生は大学や研究機関で職に就いていますか？

A：他の学科についてはよくわかりません。科目にもよりますが、概して多くの学生はスタンフォードに残って、大学運営に携わっています。アメリカの大学では、PhD を修了した多くは、教員としてではなく、講師や事務官として大学で働きます。これが第1希望かどうかはわかりません。ただ、すべての学生が、厳しい条件をとらなう研究職として大学で働きたがっているわけではないのです。ですから、これは別の選択肢です。

日本についてはわからないのですが、スタンフォードの終身在職権 (tenure) は他の4年制大学のものとは異なっています。

スタンフォードでは終身在職権を得るためには、数多くの研究を発表しなくてはなりません。4年制大学の場合は、おそらく論文1~2本と書籍1冊で十分です。なぜなら重要なことは教えることですから。他に重要なのはその人のパーソナリティです。

すべての学生が大学の研究職で働きたがっているわけではありません。中には単科大学で教えることを望んでいるものもいます。

Q：日本の大学は、大幅な予算削減で頭を痛めて

います。すべての国立大学は独立法人化し、多くの公立、私立大学が規模を縮小しています。このような状況では大学で職を得ることはとても難しいのです。大学院生が修了したとしても、大学内で仕事をすることもできません。だから、我々は学生たちに一般企業に就職することを勧め始めているのです。

A: それはいいアイデアです。アメリカでも同じことがいえます。人文学専攻の PhD の学生が、法科大学院やビジネススクールに進んで、企業に雇われることは珍しくありません。コンピューター関連の企業ではよくあることです。ゲームソフトの開発などは、PhD の学生にとって新たな分野でしょう。

大学院生への指導内容が、実際多くの場面で応用が利くものであるととらえるのはいい考えだと思います。物事の考え方や分析の仕方、文章の書き方や調査の仕方などを学ぶことは、なにも大学の教員に限ったことではなく、あらゆる職業で重要となる技術です。重要なポイントは、確実に財政負担を軽くすることにあります。アメリカでは、教育にかかる財政負担が非常に大きく、シカゴではこれが問題となっています。例えば、PhD の平均修了年数は10年、11年、12年です。少なくとも、その半分の期間は全く経済支援のない状態に陥ります。かきこい21歳の学生に、PhD に進学してお金のないまま10年ここで我々と過ごせば仕事に就けますよ、といっても無理な話です。一般的に我々がみな、自分たちの分野に良い人材を引き込みたがるから問題なのです。

Q: 日本ではあまり資金援助を期待できません。奨学金も数が減り、規模が小さくなっています。学生を大学院に呼び込むのは相当難しくなっています。

幸い、学部生の志願者数はとても多いのですが、その一方、ほとんどは一般企業への就職を希望しているため、どうやったら彼らを惹き付ける事ができるのかと考えているのです。

A: 恐らく、優秀な学生と数多く1対1のコンタクトをとることですね。私は常にこのことを念頭においています。しかしその一方で、様子が少し変わってきていまして、スタンフォードのほとんどの学部生は工学部や、理学部、経済学部の学生で、彼らはビジネススクールや法科大学院、医学部、情報科学系の学校に進もうとしています。そのような中で、例えば、古典学のコースを履修する工学部の学生というのも時々います。彼らは自分たちがこれま

で知らなかった科目に対し、大変興味をもっていきます。ですから、我々は工学部の学生と一般教養の講義でコンタクトをとることができますし、実際、彼らが進路を変えることだってあるのです。このようなケースはごく稀なのですが、それでもこのようなアプローチの仕方にもっと力を入れてもいいはずですよ。

もちろん、これは個人的な選択であったり、経済上の選択であったり、合理的な選択であったりします。将来自分はどうやって生計をたてるつもりなのか、何が一番確実なのか。恐らく我々が考えるべきことは、自分たちの研究が一般社会にどのように関係しているのか、という点です。アメリカの CEO や企業家の多くは人文学の学歴を持ち、ほとんどが経営学の学歴をもっていないという事実は非常に興味深いところです。

Q: 彼らは大学に戻るのですか？

A: いいえ、学歴のことです。彼らの専攻には、歴史や法学といった人文学系が多いのです。日本でも同じだと思います。

例えば、法学部の学生がいたとしましょう。我々は彼らに、古典学を学ぶことは弁護士になるのに最適なトレーニングだといって、彼らとコンタクトを試みるのです。今のところ、私の指導する学生の1人は、古代史の PhD に取り組んでいます。法律の学位をもっています。ですから、我々はいっと柔軟に学生を勧誘し、ここで両方やっていいんだよ、と言ってあげればいいのです。学生を惹きつけるには、私たちがより融通のきく姿勢でいなければなりませんし、場合によってはビジネスや医学と関係のある新たな科目を教える必要もでてくるでしょう。なぜなら多くの学問分野が、言語学か歴史学であり、それらは他の分野と何らかの形で繋がっているからです。

Q: TA について、もう少し説明していただけませんか？スタンフォードでは、TA はどんなことをしているのですか？

A: いい質問ですね。それについては私の仕事から例を挙げましょう。私は毎年春にエジプトの歴史に関する講義を受け持っています。学部生を対象とした大教室での講義です。

Q: 登録数はどのくらいですか？

A: 100人から200人の間ですね。その年によります。

講義を週2回行なった後、週1で、10~15人く

らいで討論をおこないます。TAはこの討論の場で、講義の参考図書に関して話すことになっています。私が講義で話した内容や、その週の図書の内容や、問題点などを解説することになっています。ですから、TAの働きは討論がうまく進むようにするためのもので、それにより指導経験も身につくものなのです。毎週なんらかのセミナーを開き、そこで私は自分のTAに講義の一つ受け持たせています。これにより、彼らは大教室で講義を行なう機会を得ます。一方、我々はその様子をビデオで録画しています。

スタンフォードには the Center for Teaching and Learning (指導学習センター) と呼ばれる、講義の進め方をチェックする専門家が集まった施設があります。彼らは、講義を録画して、教授や学生と一緒に講義内容の見直しをします。「ここはよかったけど、このやり方はまずいね」といったように、講義を審査するのです。TAも中間試験や期末試験の採点を行ないますので、序列をつける試験の採点も体験できます。このようにTAは一通りの作業をすることになっていて、ほとんどのコースでも同じような内容になっています。講義を1~2つ担当し、採点を行ない、週1回学部生と一緒に講義内容について討論し解説をします。

Q: TAになるにあたって、大学院生はなんらかの技術を身につける機会があるのですか？

A: 大学の学習指導センターが手続きをします。大学院生がTAになる場合、その前に、学生はセンターの職員と面談するか、討論や講義の進め方に関する文献を入手していきます。センターは一連の作業に関する資料を提供していますので、利用するかは学生次第です。必ずしも強制ではありませんが、学生たちには出来る限り利用してもらいたいです。

現在、我々は大学院教育の一環として、このような指導教育についても検討しています。私の場合は、毎週自分のTAと講義の内容や、参考図書、討論の進め方に関して打ち合わせしています。討論の中で学生がどのくらい発言しているのか、とか、よくあるのは、学生たちの学習意欲を引き出し、発言させ、研究書を批判的な目で読ませるにはどうしたらいいかという方法について、週1の割合で1時間くらいTAの大学院生を指導しています。

Q: 大学院の学費はどのくらいですか？

A: ゼロです。

Q: ゼロ？

A: ええ、ゼロです。ただ、名目上授業料というのは、年間35,000~40,000ドルくらいで、これに住宅費、食費などがその他諸々の経費がかかりますが、大学院生はそれらを支払いません。

Q: つまり、すべての学生が授業料分の金額を手に行しているということですか？

A: そうです、大学院生全員が受け取っています。修士課程までなら資金提供がなくても理論上は可能なのです。スタンフォードのPhDの学生は5年間資金をもらっているうえに、月額大体1,500ドルの給料を受け取っています。さらに、うまくいけば、調査旅行ための費用も出るのです。かなり気前の良いシステムです。

Q: 学生が羨ましいですね。

A: ええ、大学はかなり寛大な対応をしています。おそらく、私以上に、皆さんの方が、大学院教育の経済的側面に関して、スタンフォード大学と他のアメリカの大学のプログラムの比較には詳しいのではないのでしょうか。学生を集めることに関しては、実際何が一番いい手なのかはわかりません。例えばパークレーはスタンフォードよりも授業料はずっと安いのですから。

Q: (質問内容不明)

A: いいえ、もっと変わりやすいものです。もっと張り合わなくてはならないと思います。例えば、パークレーのアジア史研究は、古代史に関して国内でも有数のプログラムをそろえています。たとえスタンフォードがよいプログラムを整えても、パークレーは優秀な学生を集め続けます。ですから、我々ももっとスタッフの数を増やし、もっと積極的に新たなことに取り組んでいるのです。しかし、それでも学生はパークレーに出願するのです。ここに、経済学者の呼ぶ経路依存が存在するのです。つまり、大学が長い歴史の中で築いてきた評判というのはなかなか無くならないため、学生はそちらに流れていくのです。これはまさにこの種の研究機関の本質であり、だからこそ、優秀な学生を獲得するために、我々はもっと果敢に取り組まなくてはいけないのです。

我々は国外からの学生も多く受け入れています。多くはヨーロッパ圏からの学生ですが、将来的にはアジアからの学生も受け入れたいと思っています。スタンフォードは、アジアとの繋がりをもつのに、非常に恵まれた位置にあります。名古屋に関心があるのもそうです。未来はアジアにあると思います。

ですから、名古屋はとてもいい位置にあるのです。次の世紀を期待しましょう。

名古屋大学は、アメリカを含む、アジア周縁の学生を呼び込むのに最適な位置にあるのですし、あらゆる点を考慮しても見通しは明るいと思います。問題となるのは言葉の壁だけです。

Q：名古屋大学とスタンフォード大学との間で交流事業を行なうのは、難しいと思いますか？

A：いや、できると思います。ただ、「exchange」がどのような内容をさすのか、あと、予算はどれくらいなのかにもよります。スタッフの行き来ができるといいのではないのでしょうか。そして最終的に、それぞれの大学院生が1年以上滞在できればいいですね。おそらく簡単にできると思います。

Q：それでは、後ほど交流事業について話し合しましょう。

A：いいですね。実際どのように推進していけばよいかわからないのですが、スタンフォードに

は、そのような協定を取り仕切る事務があります。ですから、我々が今最初にすべきことは、このような交流を持ち続けることです。名古屋大学からは、今度の10月にこちらに来てもらい、次回から順次両校の行き来があればいいですね。

大学院生が1年間交換留学することに関しては、少し手続きが必要になりますが、とにかく不可能ではありません。我々の分野の場合は、発掘調査プログラムのようなものを開設することですね。エジプトで発掘のトレーニングができれば、多くのアメリカ人学生を見込めるでしょう。これは「協同事業」といった場合の1つの方法ですが、他分野ではまた違った形のプログラムが考えられるでしょう。

名古屋には、ヘレニズム時代エジプトの考古学に精通しているスタッフがいるのです。エジプトでギリシア時代の遺跡が調査されているのは数少ないのですから、これは名古屋大学にとって大きな強みとなるのです。